

幼稚園教諭・保育士養成課程の 「ピアノ演習」における指導実践報告（１）

Practical Teaching Report on Piano Exercises in Kindergarten Teacher and Childcare Worker Training Course（１）

北川 聖子
Seiko Kitagawa

問題の所在

幼児教育の基本方針を解説する『幼稚園教育要領解説』¹⁾に、感性と表現に関する「表現」の事項がある。そして、その中の「音楽表現」において、幼稚園教諭・保育士は、「弾き歌い」をする力を求められている。このため、保育者養成機関では、「ピアノ」や「声楽」の演習科目が設置されている。

しかし近年、幼少期からピアノを学習した上で大学や専門学校に入学する学生は、圧倒的に少ない。その結果、大譜表の読み方、運指番号の見方、ピアノの鍵盤のドレミ…の位置や音の高低など、非常に初歩的な説明や指導から始めなければならないのが現状である。

とはいえ、短期大学や専門学校といった２年制の教育課程に在籍する学生は、１年次の保育実習Ⅰや２年次の幼稚園教育実習・保育実習Ⅱ・就職試験など、極めてタイトなスケジュールを念頭に置きながら学習していかなければならない。したがって、２年次に進級するまでに、少なくとも両手で演奏ができるようにしておく必要がある。

そこで、ピアノの学習歴が全くない学生であっても、１年次のうちに、両手で演奏ができるようになる授業計画を考案した。本稿は、その指導実践を報告するものである。

授業内容

対象科目と指導体制について

対象となる科目は、Ａ専門学校・こども保育学科（以下、本校）における2023年度１年Ａコースの「保育の表現技術（ピアノ）」^{注1)}である。本校には、２つのコース（Ａコース／Ｂコース）が併

設されており、Aコースは、幼稚園教諭の免許と保育士の資格を取得することができる。2年制の教育課程で、22人が在籍している。

また、授業は、非常勤講師2名（主担当：筆者／副担当）が担当し、主担当の教員が、教室（通称：ピアノ室）の前方で授業を進行し、副担当の教員が、後方で支援する体制で運営している。そして、この教室には、電子ピアノが学生用に30台と教員用に2台設置されている。学生たちは、一斉に入室・着席し、主担当の教員の方を向いて、説明を聴いたり、ヘッドフォンを装着して練習をしたりする。ちなみに、学生の学習進捗については、読譜自体が困難な初学者17人（77.3%）から、Burgmüllerの練習曲程度を弾くことのできる既習者5人（22.7%）までが混在している。

なお、授業概要・到達目標・シラバス・成績評価は、以下の通りである。

〈授業概要〉

保育士や幼稚園教諭に必要な「音楽表現（ピアノ）」に関する基本的な知識や技術を修得するために、保育現場で使用される楽曲を取り上げながら実践していく。具体的には、「季節のうた」・「生活のうた」・「行事のうた」を中心とする。また、定期的に「確認テスト」^{注2)}を実施することで、授業の中で学習した楽曲を確実に演奏する力を定着させることもねらいとしている。

〈到達目標〉

ト音記号とヘ音記号を区別して理解し、正しく読譜した上で、右手で楽曲の旋律を、左手で適切な伴奏（単音や和音）を付けて弾くことができるようになる。また、それぞれの楽曲の曲想を感じ取り、生き生きと楽しく演奏ができるようになることも目標としている。

〈シラバス：前期15回〉

回	4月～7月に学習する曲	奏法
1	オリエンテーション	
2	春のうた 《ちょうちょう》	右手：旋律を弾く 左手：各小節内の1拍目の音（単音）だけを右手に合わせて弾く
3	春のうた 《チューリップ》	右手：旋律を弾く 左手：各小節内の1拍目の音（単音）だけを右手に合わせて弾く
4	生活のうた 《あさのうた》	右手：旋律を弾く 左手：単音と和音の組み合わせで右手に合わせて弾く
5	「確認テスト」（第2回～第4回まで の中で学習した曲から実施）	両手で楽譜通りに演奏する (弾き歌いにも挑戦する)

6	初夏のうた 《こいのぼり》	右手：旋律を弾く 左手：単音で右手に合わせて弾く
7	初夏のうた 《かたつむり》	右手：旋律を弾く 左手：単音で右手に合わせて弾く
8	生活のうた 《おかたづけ》	右手：旋律を弾く 左手：単音か和音で右手に合わせて弾く
9	「確認テスト」（第6回～第8回まで の中で学習した曲から実施）	両手で楽譜通りに演奏する (弾き歌いにも挑戦する)
10	晩夏のうた 《かえるの合唱》	右手：旋律を弾く 左手：和音で右手に合わせて弾く
11	晩夏のうた 《七夕さま》	右手：旋律を弾く 左手：和音か分散の形式で右手に合わせて弾く
12	生活のうた 《おべんとう》	右手：旋律を弾く 左手：単音と和音の組み合わせで右手に合わせて弾く
13	「確認テスト」（第10回～第12回まで の中で学習した曲から実施）	両手で楽譜通りに演奏する (弾き歌いにも挑戦する)
14	期末試験対策（試演発表）	両手で楽譜通りに演奏する (弾き歌いにも挑戦する)
15	期末試験 ^{注3)} 、まとめ ※多目的室 ^{注4)} で実施	両手で楽譜通りに演奏する (弾き歌いにも挑戦する)

〈成績評価（評価基準）〉

- ・両手で演奏すること（右手が旋律、左手は単音や和音、あるいは分散の伴奏形式）
- ・旋律が正しいこと、かつ、正確なリズムであること
- ・子どもたちが歌うことのできる、かつ、その楽曲の曲想に相応しいテンポであること
- ・ミスタッチをしたとしても、弾き直しをしたり止まったりせずに通奏すること

シラバス作成にあたっての「ねらい」について

前期の授業（４月～７月）は15回で、最終回で期末試験を実施することとなっている。なお、シラバスを作成する際に留意したことは、下記の４点である。

- ①「季節のうた」や「行事のうた」を、その季節と連動させること
- ②「生活のうた」を定期的に取り入れ、１年次の間に学習しておくこと
- ③既に学習した曲であっても、短いスパンの中で反復練習をすること
- ④ひと月に１回を目途に、人前で演奏をすること

①その時々「季節」や「行事」を感じながら学習する

前述した通り、学習進度については、個々人の間で大きな開きがある。そのため、楽曲の調号やリズムの難易度を考慮しながら段階的に教授していく方法もあるだろう。しかし、筆者は、学生自身が「日本の四季」やその時々「行事」などを、その都度感じながら学習していくことに重点を置いた。なぜならば、子どもたちに歌を歌ったり、ピアノを弾いたりすることの目的は、子どもたちと一緒に、巡る季節の美しさや行事の楽しさを「音楽」を通して共有していくことであり、学生自身がそれらを感じ取りながら学習していくことに意義がある、と考えているからである。

②「生活のうた」に親しむ

「生活のうた」は、いずれの曲も付点が多用されている。このような楽曲は、初学者にとって、苦戦する要因の1つのように見受けられる。しかしながら、本校では、例年2年次の6月に「幼稚園教育実習」が実施されており、実習園からの課題曲は、概ね「生活のうた」を含んでいる。1年次の授業は、12月で終了してしまい、次年度までの3か月間全く授業がない状況となる。このことを踏まえて、1年次のうちから計画的に1曲ずつ学習し、少なくともピアノ演奏だけでもできるようになることを目標とした。

③演奏技術の定着を図る

学生は、一度譜読みをして演奏することができれば、「できた」と思い込みがちだが、しばらくすると、弾くことができなくなってしまう傾向にある。しかし、「できる」ということの真意は、いつでもどのような状況であっても、スムーズに通奏できるレベルのことを指していなければならない。そうした背景から、一度学習した曲であっても、短い期間の中で復習するシステムを取り入れた。具体的には、1週間に1曲の課題をクリアしていき、4週目には、3週目までに学習した3曲の中から1～2曲を学生自身が選択・練習し、全員の前で演奏するのである。これが、後述する「確認テスト」である。

④「緊張」を何度も経験し、「成功体験」を増やす

学習歴の長い学生であっても、人前での成果発表会や実技試験の際、「とても緊張する」「緊張した」といった感想をよく耳にする。これが初学者であれば、尚のことであろう。徐々に「緊張しない」ようにしていくためには、「何度も緊張する」という経験を重ねて乗り越えていくしかない。つまり、「緊張に慣れること」と同時に、「成功体験を増やしていくこと」が重要であると考え。そこで、多くの教育機関が実施しているような、成績評価を伴う中間試験や期末試験だけではなく、「普段から人前で演奏することに慣れる」機会を設けた。それが、ひと月に1回の「確認テスト」である。

授業方法について

前述した通り、ピアノに触れたことがないという学生が約80%を占めていることから、初回は、各自自由にピアノの音を出してみることにした。それから、筆者が、ピアノについて基本的な説明をした上で、演奏する際の正しい手のフォーム・手首の位置・指の立て方などを一人ひとり巡回し

ながら指導をした。

そして、翌週以降の課題となる３曲の楽譜をまとめて配布し^{注5)}、そのうちの《ちょうちょう》の予習をした。授業の中で使用する楽譜を実際に用いて、大譜表・調性・拍子・リズムや指使いなどについての説明をした。まずは、筆者が、楽譜通りにピアノ伴奏をしてみせ、次に、右手で旋律のみを弾きながら階名で歌ってみせた。その後、学生たちは、各々練習を開始した。その間、筆者と副担当の教員が交互に巡回しながら、その都度指導を行った。個人の練習が終了した後、《ちょうちょう》を知らない学生が一人もいなかったこともあり、筆者の伴奏に合わせて、全員で最初は階名で、続いて歌詞を付けて歌を歌って締め括りとした。

授業終了時、今回学習した《ちょうちょう》をもう一度１週間かけて練習してくるように指示した。練習をする際、右手は指使いに注意すること、左手は各小節の１拍目の音（単音）を右手の旋律に合わせてくることが、とした。また、第２回目以降は、毎週一人ひとりの練習成果を筆者が直接確認・指導することも併せて伝えた。

このようにして、基本的には、授業の終盤で翌週の課題曲の予習を全員でする。その予習を踏まえて、各自で１週間練習をする。それを筆者が一人ひとり直接確認・指導する、というスタイルで授業を進めていった。

第２回目以降の授業の進め方については、冒頭の１０～１５分間、全員が、一斉にヘッドフォンを装着し前回の授業で予習した課題曲を再び練習する。１５分経過した後、筆者が、学生を学籍番号順に一人ずつ呼び、呼ばれた学生は、教室前方の教員用の電子ピアノで演奏をする。自分が呼ばれるまでは、自席でその日の課題の練習と翌週の課題の予習をしながら待機する。チェックのポイントは、右手の旋律とリズムが正しいこと、運指番号を順守しレガートであること、左手が和音の場合は指番号が正しいこと、そして、何度も弾き直しをしたり止まったりしないこと、である。２～３回のミスタッチは許容範囲とし、クリアした学生には、楽譜に合格のシールを貼っていった。合格した学生は、自席に戻り、既に配布してある次の課題曲に取り組んでいく。不明なことがある場合は、巡回している副担当の教員に指導を仰ぐことになっている。一方で、その週に合格に至らなかった学生には、次の課題曲と併せて、再度練習を重ねてくるように指示した。

また、演奏方法については、前掲の「シラバス（奏法）」にもある通り、最初のひと月目は、右手は旋律を、左手は各小節の１拍目だけを単音で必ず合わせられるようにした。ふた月目は、２拍目以降も合わせられるようにした。その後、３和音や分散の形式も導入し、徐々に、左手の奏法が楽譜通りに演奏できるように指導した。

練習成果を可視化し、達成感を味わう

演奏技術を着実に身に付けていくためには、毎日の練習を積み重ねていくほか方法はない。１週間でどの程度の練習ができたのか、それは正しい練習方法であったのか、といったことを毎週一人ひとり直接確認・指導していった。また、前述したように、いくつかのチェックポイントをクリアした場合、「合格シール」と称するシールを楽譜に貼っていった。シールを貼ると、学生たちは「頑

張ったことが認められて嬉しい、次の課題曲も頑張ります」などと発言し、その「達成感」が「練習の継続」に繋がり、さらには、「向上心」を高めていったように見受けられた。

それと同時に、この「合格シール」は、学生の一人ひとりの学習進度を可視化するための、また、学習成果を学生と共有するための手段として、筆者にとっても非常に有効的であった。

「コメントシート」を活用し、「振り返り」をする

「確認テスト」や期末試験が終了した後は、自身の演奏を振り返ることおよび授業内での不明点を明らかにする目的で、毎回コメントを書かせた。回収後は、筆者が演奏に対する評価と不明点に対する解説を書き込み、返却した。不明点が共通して全体的に多く見受けられた際は、翌週の授業の冒頭で、学生全員に向けて補足説明を行った。

成 果

教員の評価

評価の仕方については、前掲した「評価基準」に従い、2人の担当教員のそれぞれの評価をまとめるかたちで行った。前期期末試験において、22人の受験者のうち、両手で演奏ができなかった学生は1人もいなかった。また、少々ミスタッチはあるものの、何度も弾き直しをしたり、止まったりする学生もいなかった。くわえて、特筆すべき点は、「弾き歌い」(2曲)に挑戦した学生が8人いたことである。この数は、全体の36.4%に相当した。声量はやや不十分ではあったものの、正しい音程・正確なリズム・正しい歌詞で、しっかりと通奏することができていた。

学生の反応や気付き

前期期末試験の演奏およびこれまでの授業を振り返った際の「コメントシート」^{注6)}の内容を、以下に記載する。

- ・今日の発表でみんなの前で、初めて弾き歌いのできたのが良かったです。アップライトと電子ピアノだと弾いた感触が全然違うので、発表のときに弾けたのも良かったなと思いました。後期は、色々な曲に挑戦したいです。
- ・ちょうちょは、両手で上手にひけた。かえるはとちゅうまちがえたけど、あるていどできた。
- ・焦らずにけんぱんを押せたので音がはっきりだせたのが良かったです。右と左を合わせて弾けるようになって良かった。左手がもっと上手く弾けるようになりたいです。
- ・今日のテストは、1回も間違えたり止まったりせずに弾けたので練習の成果が出せたかなと感じました。後期は、「朝のうた」や「おべんとう」のようなリズムが難しい曲が苦手だなと前期の授業で感じたので、リズム感という部分を克服していきたいと思います!!
- ・練習期間はだいぶあり残れる日は必ず残って弾いていたがいざ前にたつとどうしても緊張してしまい間違えてしまった。ピアノは楽しいから後期でもがんばりたい。一曲でも子ども達に弾

いてあげられるようになる。

- ・ やっぱり、どうしても人前だと緊張してしまうのでなるべく緊張しない様になりたいと思いました。今日まで、色々な曲を弾いてきて忘れない様に練習はしていきたいと思います。
- ・ 前にいくまで緊張したけどいざ弾いたら大丈夫だった。前期ではやっと楽譜が読めるようになったのでそれが自分的には大きなことだと思います。そして後期は、もう少しだけ難しい生活の歌などが弾けたりなめらかにゆっくり弾けるようになりたいです。夏休みもたくさん練習したいです。
- ・ 今回、チューリップとちょうちょを弾いてみて、ちょっとまちがえてしまった所はあったけど、止まらずに弾けてよかったと思いました。後期に向けては、ちょっとずつリズムを正しく正確に弾きたいことと難しい曲もまだ沢山あると思うから、時間があるときに頑張って練習したいです。
- ・ 今日の発表で少しミスをしてしまった所が残念だと思いました。他の所は上手に弾けたと思いました。両手で歌を歌えるように頑張りたいと思いました。リズムの曲があるのでそれも練習したいです。
- ・ 2曲とも弾き歌いをしようと思ったのですが1曲しかできなかったのが家でしっかり練習したい。後期はなるべく弾き歌いができるように家で暗符してしまうぐらい練習をしたいと思います。
- ・ 今回のテストで練習の時よりテンポと音を少し間違えてしまったけど、最後まで弾けることが出来て良かった。前期は音符を読むことが苦手だと感じていたので、後期は音符が読めるようになり、苦手と感じないように授業に取りくんでいきたいです。
- ・ 左手をつかえるようになったことと、違うリズムでも両手を動かすことができるようになった。ピアニストになる。楽譜を見て、どの長さ、リズムで弾くのか理解できるようになる。
- ・ 今日のテストでは、私にとって1番よくできたと思っています。止まることなく、最後まで弾くことができて、とってもうれしかったです。ただ、テンポと歌っている声の大きさが不安に感じました。後期では、より自信をもって大きな声で楽しく弾きたいと思いました。そして、もっと難しい曲にも挑戦することをまず目標にしていきたいと思います。
- ・ 今日のテストでは緊張して、かえるのがしょうのいつもミスしない所でミスしてしまい、くやしい思いをしました。ピアノを弾きながら歌うと、どちらかに意識がいつてしまうのが難しいと思いました。後期では、日頃から練習を継続することを基本として、弾き歌いが当たり前になれるようになりたいです。また、楽譜にドレミを書かなくても弾けるようになりたいです！
- ・ 本番に弱くて、ミスをしてしまうことがあるけど今回はしっかり練習を重ねたので上手に弾けたと思います。上手に弾くことプラス弾き歌いができるようにしたいと思います。それと、課題曲だけでなく色々な曲に挑戦していきたいです。
- ・ 集大成として弾き歌いに挑戦しました。自分でもビックリしておりますが、小さかったかと思われそうですが、歌えた事は次につながると感じております。本日、席に戻る時、励ましの言葉「きれいだったよ！」と言ってもらえて、自信ができました。仲間って本当にすばらしいと思います。ちょっぴり（練習がいる、たくさん練習しないとダメな曲）難しい曲にも練習してみたいと思いました。

- ・試験、ものすごく緊張しました。前期は聴きなじみのある曲を弾き歌いするという難しさを感じました。でもできるようになってよかったと思います。後期に向けて、難しい曲にも挑戦したいです。そして、最終的には色々な曲全てに弾きながら歌えるように頑張りたいです。
- ・今日は練習不足で間違えてしまった。前期は一生懸命がんばれたので後期も毎週がんばりたい。冬には実習もあるのでそれに向けて弾き歌いも練習する。
- ・普段よりも逆に落ちついてできました。心は苦戦しまくって、いじけそうになったけど落ちついてやれた。歌と両立できるようにもっと上を目指していきたいと思います。
- ・思ったよりスラスラ弾けた。後期では、止まらずに一定のリズムで弾けるようになりたいです。
- ・右手と左手で弾くのが最初は絶対ムリだと思いましたが、だんだん弾けるようになったことがとても嬉しく、楽しさが出てきました。後期は、全部の指がきんとうに同じ力で、けんばんを押せるようにしたいのと音階をふらずに音符を読めるように頑張ります。
- ・とても上手にできて大満足です!!

(以上22名)

考 察

指導実践の成果について、上記の学生のコメントも鑑み考察を行う。まず、「両手で弾くことができた」や、「弾き歌いができた」と記述している者は18人で、81.8%であった。よって、両手で演奏ができた実感があること、また、演奏の途中で少々ミスタッチがあったとしても、止まることなく最後まで通奏できた、と肯定的に捉えていることが分かる。これらの記述は、教員の評価とも一致していた。

次に、試験の本番で上手に演奏ができた理由として、「練習の成果が出せた」「練習を重ねたから」と記述している者は2人の9.1%で、練習を積み重ねることの大切さにも気付いていることが窺える。さらに、上手に演奏ができたことで、「ピアノが楽しい」「とてもうれしかった」「嬉しくて楽しさが出てきた」などと記述している者は5人で、22.7%であった。そのような感情が原動力となり、「なめらかにゆっくり弾けるようになりたい」「後期も頑張りたい」「色々な曲にも挑戦したい」「難しい曲にも挑戦してみたい」といった意欲的な発言にも繋がったと考えられる。

また、「緊張した」と記述した者は4人で、20%に満たなかった。これは、毎月の「確認テスト」の実施によって、人前で演奏することに慣れ始めている兆しではないかと推察する。くわえて、「テンポ」「歌声の大きさ」「アップライトピアノと電子ピアノの鍵盤の感触の違い」などを気にする記述も散見され、自身の演奏を冷静に俯瞰していることが分かる。

最後に、「一曲でも子ども達に弾いてあげられるようになる」という記述からは、自身が保育者として活動している姿を思い描いていること、そして、何よりも自身の演奏が、子どもたちのためであると理解できていることが分かる。

今後の課題

本稿は、幼稚園教諭・保育士養成課程の「保育の表現技術（ピアノ）」（１年生前期）科目における指導実践を報告するものであった。ピアノの学習歴の有無に関係なく、受講生全員が半期の間に両手で演奏することができるようになった。さらに、８人の36.4%の学生は、「弾き歌い」の演奏もできるようになった。

しかしこのような中で、問題も浮かび上がった。それは、学習進度に大きな開きのある22人もの学生たちを、１つの教室の中で一斉に指導していかなければならない点であった。注５）の通り、取り扱う楽譜の種類や配布の仕方ですら当初から工夫をしたが、それでも改善とまでは至らなかった。つまり、初学者に照準を合わせてばかりいると、既習者のさらなる成長を妨げることになる。その反対に、既習者に照準を合わせると、当然初学者は対応できなくなってしまう、といった状況が生じ始めた。どのレベルに照準を合わせて授業運営すべきなのか、という点において非常に苦心した。

今後は、上述した課題に対する改善策について、稿を改めるつもりである。

引用文献

- １）文部科学省. (2022). 幼稚園教育要領解説（第6刷）. フレーベル館.

使用教材

尾林裕美子・濱田郁子 他. (2021). こどもの世界：保育のための歌と遊び. ドレミ楽譜出版社.

注 釈

注１）本校には、「ピアノ演習」科目が４つある。１年次に、①「保育の表現技術（ピアノ）」・②「ピアノ演習Ⅰ」、２年次に、③「ピアノ演習Ⅱ」・④「ピアノ演習Ⅲ」が設置されている。

注２）テストの進め方については、授業冒頭の10～15分程度を直前練習の時間とし、学生全員が、ヘッドフォンを装着し一斉に練習を開始する。所定の時間が経過した後、学生たちは、練習を止め、電子ピアノを片付ける。そして、学籍番号順に一人ずつ前方の教員用の電子ピアノを使用して演奏し、それまでの成果を発表していく。また、このテストは、「試演」という意味合いであり、採点の対象になるものではない。

注３）本校の方針により、期末試験のみで成績評価を行うこととなっている。当日は、「確認テスト」で演奏した曲以外の２曲で行った。

注４）期末試験は、「多目的室」と呼ばれている教室で実施した。この教室には、アップライトピアノが１台だけ設置されている。

注５）楽譜については、基本的に譜名が記載されていないもので、かつ、左手の伴奏が２種類の形式（①単音か３和音と②分散）のものを同時に配布した。初学者には前者①を、既習者にはどちらの形式でも弾くことが

できるように指導した。また、前掲の「シラバス」の通り、授業の課題は、基本的に1週間で1曲としている。しかし、学習歴の長い学生にとっては、手持ち無沙汰の状態となってしまう。そのことから、課題曲をまとめて配布することで、各自の進度に合わせて学習できるように工夫をした。

注6) 学生のコメントについては、原文のまま用いた。ちなみに、「発表」「テスト」「人前」といった表現が散見されるが、これらは全て「前期期末試験」のことを指している。